

蔣汪合作政權成立前史

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学政治経済研究所 公開日: 2009-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土屋, 光芳 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/1732

蔣汪合作政權成立前史

土 屋 光 芳

はじめに

一九八九年から九〇年にかけて東欧とソ連で起きた出来事、特にベルリンの壁の撤去と東欧各国の共産党一党制の変更は、必ずや後世の歴史において、第二次大戦後に成立したソ連・東欧共産主義体制の解体を告げる象徴的事件として記憶されることになるであらう。一方、この時期、東ヨーロッパではこのような「革命的」変化を迎えていたのに対して、東アジアではむしろそれとは正反対の結果に終わったように思われる。

一九八九年六月、中国の北京で起きた「天安門事件」の結末は、その後を生じた東欧情勢と余りにも違い過ぎた。学生及び市民の中国共産党政府に対する異議申し立ては、中国当局によって一方的に「反革命暴乱」として処理されたばかりでなく、さらに不幸なことに、当初は中国政府を激しく非難した西側諸国にとっても、数カ月後の東欧の激変と東西ドイツ統合という予期せぬ事態にどう対応するかに忙殺される中で、中国の出来事は「化外の地」のごとくであった。

つまり、政治体制の質の如何にかかわらず、アメリカにとっては対アジア・対ソ連戦略上の拠点として、また、日本にとっては経済上の理由から、何はさて置き中国の政治的安定こそ最優先課題であるといった態度のようなのである。

しかしながら、同じ東欧の一国、ルーマニアにおけるチャウシェスク体制の急速な崩壊過程を目の当たりにすると、国民の支持によってではなく恐怖によって維持されている政治体制がどれほど脆いものであったかは歴然としている。一見強固に見える政治体制も、何かの出来事がきっかけとなって（ルーマニアではいわゆる「ティミショアラの虐殺」がそうであった）、たちまち崩壊するかも知れないのである。皮肉な言い方をすれば、「天安門事件」が、一九〇五年にロシアで起きた「血の日曜日事件」のように、中国共産党「王朝」の命運の尽きる前兆にならないとも限らないのである。

中国では一九一一年、辛亥革命によって清朝が崩壊した。それ以降の歴史を振り返ってみると、誤解を恐れずに言えば、結局のところ、国民党政権にしても共産党政権にしても制度としての体制の創出に失敗してきたといえるのではなからうか。それゆえ、表面に現れた政治的出来事がどんなに理想主義的な色彩を帯びてはいても、その実、最高位の政治ポストをめぐる権力闘争である場合が多かった（いわゆる「文化大革命」もまたその例の漏れなかったようである）。この点からすれば、中国は「法治」ではなく「人治」であるという歴史的連続性があるのかもしれない。さらにもう少し掘り下げてこの「人治」の中身を考えてみれば、天安門事件の際にも鄧小平と並んで軍人の楊尚昆の動静が注目されたように、中国の歴史的ドラマは常に文人と武人との合従連衡であったと言っても過言ではないであろう。

ところで、第二次大戦以前の日中関係を考える場合に、一方の国民政府が満州事変の翌年の一九三二年から盧溝橋事件の起こる一九三七年まで、何らかの意味で武人と文人の連合政権である「蔣汪合作」政権だったことに私は注目したい。⁽¹⁾

蔣汪合作政權とは、武人（軍官）の蔣介石が軍事を担当する反面、文人（文官）の汪精衛が行政院長と外交部長を兼任して政治（特に外交）に携わっていた政權のことである。その間、蔣介石は共産党の制圧（「勦共戦」）に専心し、その「成功」によって内外における自らの威信を高めるとともに、国民政府における自己の軍事的、政治的基盤をより強固なものにしていった。他方、汪精衛は、「九・一八事変」（満州事変）以後悪化した日中関係の修復に携わり（一九三三年の塘古協定締結として結実する）、さらに露骨になっていく日本軍の華北独立化の挑発に対処していく。この対日交渉の過程で中国側は「勦共戦」を優先していた関係上、日本側に対して譲歩をよぎなくされる。汪精衛は対日交渉の責任を一手に引き受け、遂には、この交渉結果を屈辱とする者の銃弾を受けて重傷を負い、三五年十一月、行政院長を辞任する。これだけの歴史的経過を追っただけでもこの「合作」は汪精衛にとって割りのいいものだったとは言えないであろう。

それにしても、汪精衛にとって不利となる蔣介石とのこのような「合作」は何故におこなわれたのであろうか。それまでの蔣介石との抗争を通じて汪精衛は初めからそのような合作が恐らく自分に不利なものとなるであろうことがわかっていたはずである。⁽²⁾ それにもかかわらず、汪精衛は敢えて蔣介石との合作に踏み切った。その理由を汪精衛の権力欲だけで説明するわけにはいくまい。⁽³⁾ むしろ蔣汪合作政權の成立と解消の過程を説明することによって初めて事の本質が明かになってくるのではなからうか。

そこでまずはじめに孫文亡き後から蔣汪合作政權成立までの国民党の歴史を簡単にたどってみよう。

一九二五年に孫文が北京で斃れた後、広東を本拠地に国民政府が成立する。その初代主席に汪精衛は選ばれ、軍権を握

る蒋介石との相互協力関係がしばらく続く。この時期を「第一次蔣汪合作」と呼んでよい。しかしながら、これはすぐに破綻する。翌二六年の三月、蒋介石は中山艦事件を発動し、汪精衛が実質的にその政治的責任をとり、病気を理由として国外に脱出するのである。

その後、帰国した汪は武漢で共産党と組んだり、北京では閻錫山の武力に頼ったり、また広東の陳済棠の武力をバックにしたりして蒋介石に対抗するが、遂にかれより優位に立つことはできなかった。それにもかかわらず、「九・一八事変」(満州事変)という「国難」をきっかけに汪精衛と蒋介石との「第二次蔣汪合作」はなるのである。この第二次合作の結果、一九三二年一月二十八日、蔣汪合作政權は始まる。この政權は相当強固なもので、汪精衛が近衛声明に呼応して一九三八年に重慶を脱出するまで事実上存続するのである。後者の第二次合作を理解するためにはその前の第一次合作の成立過程及びその破綻の原因を理解しておかなければならないと私は考える。というのも、汪精衛と蒋介石との政權をめぐる関係は実質的にこの第一次合作の時期に始まっているからである。

とりあえず、本稿は、孫文の死後、第一次蔣汪合作政權が何故、またどのように成立し崩壊していくか、の解明に当てるつもりである。時期的には、一九二五年の孫文死去の前後に始まり、一九二六年三月二十日の中山艦事件の頃までとなる。ちなみにこの中山艦事件こそ汪精衛が蒋介石との最初の権力闘争に敗れる象徴的な事件と言ってよい。

以下の叙述の順序としては一で孫文の死去する直前までに汪精衛が中国国民党史の中でどのような地位を獲得していたかを押さえておきたい。二では孫文死後の後継者闘争で、その当時、第一順位の後継者であった胡漢民が何故に脱落し、汪精衛がその候補として如何にして浮上してきたのか、それとの係わりで汪と蒋介石との一回目の合作が何時始まったの

か、について検討する。三では、汪精衛が中山艦事件で蔣介石に何故に敗れていくのかを考察してみよう。

注

(1) 「蔣汪合作」という用語は、当時もしばしば使われていたようであるが、最近、出版された本のタイトルにも使われている(張同新『蔣汪合作的国民政府』(黒龍江人民出版社 一九八八年)。

(2) 第二次蔣汪合作政權の成立直後、汪精衛は張學良と揉めて行政院長を一時辞職、一九三二年八月渡欧する。翌三三年三月には帰国し、同年八月に行政院長に復職する。復職するまでの間に、汪派の人物、陳公博と会ったとき、陳は「自然誰幹行政院都倒霉」と率直な意見を述べる。しかし汪精衛はこれを否定していない(李鏞・汪瑞焯・趙令揚編註『苦笑録・陳公博回憶 一九二五至一九三六』(香港大學亜洲中心 一九七九年 二九三ページ)。

(3) 波多野善大は汪の「政權欲しさ」、蔣の「責任回避」、「拳國一致」(『大義』)の三つの可能性を掲げているが、確かにいずれもあったのだろう(『国共合作』中公新書 一九七三年 一四三ページ)。

—

孫文が北京の協和(ロックフェラー)病院で死の床についていた頃、舞台裏では孫文の遺書作りが企てられていた。その作成過程についての堀川哲男の卓越した考察からも明らかのように、汪精衛は当時、病床にある孫文の身近にいた国民党員の中の右派と左派の意見を取りまとめる役を果たした。この事実は汪精衛およびそのほかの国民党員にとってどのような意味を持っていたのであろうか。

当時、広東に本拠をおく国民党は、孫文の着手した国共合作をさらに一層推進しようとする左派とその停止を求める右

派との対立がますます激しくなっていた。折りもあり、孫文は北京に赴いて北方の軍閥（段祺瑞）との「国民会議」開催の交渉に当たろうとした矢先、病に倒れてしまった。今や孫文という強力な指導者がいなくなった以上、国民党はその一体性を維持しながら、同時に国共合作を続行することが容易なことではなくなってしまったのである。要するに、この時、国民党は必然的に孫文の後継者争いを含んだ分裂の危機に立たされていたといつてよからう。

一方、北京ではとにかくにも『孫文遺囑』がまとまった。それは党内の左派と右派の間を取り持った汪精衛の功績に他ならなかった。そうであるならば、この功績こそ汪精衛が同年七月、広東で成立する国民政府の初代主席に選ばれる道を開くものとなったであろうことは想像に難くない。⁽²⁾しかしながら、それはほんの出発点にしか過ぎなかったといつてよい。北京での出来事は当時の国民党の本拠地、広東からは遠く離れていたからである。したがって、汪精衛が国民政府初代主席に何故に選出されたのかを究明するためには当時の広東の政治軍事状況を当然踏まえなければならないと考える。

ところで、広東の情勢に言及する前に、そもそも汪精衛はそれまでの国民党史の中でどのような位置を占めてきたか、を理解しておく必要がある。そこでまず汪精衛の生い立ちから簡単に洗ってみよう。

汪精衛は広東省で光緒九年（一八八三年）に生まれている（但し、戦前日本で出版された汪精衛の伝記は何故か一八八四年生まれとなっている⁽³⁾）。汪精衛は父親晩年の後妻の子であり、兄弟四人、姉妹六人の内の末子であった。汪は十二歳のときには母と、十三歳のときには父と死別、長兄に育てられている。そのため私塾で教えて家計を支えなければならなかったが、叔父の蔵書を使って読書が続けることができ、十八歳の時には広東省番禺県の県試に一番で合格する。そのまま平穏な時代が続いていれば汪はおそらく清朝の官僚になっていたであろう。しかし、科挙制度は廃止と決まる。そこで

汪は二十歳の時、広東省の日本留学試験を受けて合格、今日の法政大学に入学し一九〇六年に二十三歳で卒業している。日本留学中の一九〇五年に孫文の演説を聞いて感激し、折りから結成されたばかりの中国同盟会に入る。同時に革命の宣傳雑誌、『民報』の発刊に携わり、その有力な論客の一人となったことから汪の革命家としての経歴は始まるのである。なお、孫文の死後、その後継者を競り合うことになる胡漢民とは、日本留学時代の同学の広東人仲間であり、かれもまた『民報』の論客であった。

それでは一九〇五年に中国同盟会に入ってから一九二五年に孫文が死去するまでに、汪精衛はこの同盟会（一九一二年中華国民党に、一九一九年中国国民党に名称変更）においてどのような役割を果たしてきたのであろうか。次のような点がおおむね指摘できるであろう。

第一に、汪精衛は孫文の革命運動に参加した初期の頃から、革命の宣伝雑誌、『民報』の主要な論客として注目されていたことがあげられる。『民報』は、戊戌の政変で日本に亡命していた康有為等が立憲君主制を説いていた『新民叢報』を論敵とし、清朝打倒、共和制実現を唱道する「三民主義」の普及を目的としていた。汪精衛の論文も概して漢民族のナショナリズムを鼓吹する滅満興漢の主張に力点が置かれ、アジテーターの役割を立派に果たしていたとい⁽⁴⁾ってよい。一方、中国の国内に持ち込まれた『民報』は相当数の読者を獲得、その影響を恐れた清朝政府が日本政府に圧力をかけ、孫文や汪精衛等は国外退去を命じられる。孫文等は、南洋に逃避するとともに、当地で革命の宣伝とその資金調達のための活動を行い、その間、汪は孫文の有力な協力者の一人となっていく。ちなみに、こうした活動を通じて汪はベナンの華僑商人を父に持つ陳璧君（汪の将来の夫人）とも知り合っている。

汪が孫文の革命運動に参加した前後、革命の企ては失敗に次ぐ失敗の連続であった。その頃、ロシア・アナキストのテロ活動の影響を日本で受けて、汪精衛も一九〇九年にその活動をペンによるものから直接行動に移すのである。実際、北京に潜入して清朝の要人暗殺を実行に移したが、その計画は発覚、翌一九一〇年には捕縛されてしまう。その審理の間汪精衛の提出した供書を読んだ当時の民政大臣、肅親王は、汪の文章に大層感心し、その才を惜しんで死一等を減じたとされている。実際には革命勢力側に殉教者を出し運動がさらに激化するのを恐れたからというのが真相のようである。⁽⁵⁾ いずれにしても、翌一九一一年に辛亥革命の勃発後、汪は出獄し、これが革命家としての勲章となったことは疑いない。

要するに、汪精衛は革命のアジテーターとしてばかりでなく革命の実践家としても鳴らしていたということが第二に指摘できるのである。さらにここで付け加えておかなければならないのは、当時既に革命の同志であった陳璧君は、汪の捕縛後、両親に私財を投じさせる一方、汪救出に東奔西走していることである。彼女は、辛亥革命後、釈放され出獄した汪と結婚している。このエピソードからも明らかのように、汪夫妻はともに革命家として自他ともに認める存在になっていたといってもよいであろう。

第三に、戦後の日本における汪精衛研究の先駆者である山田辰雄が指摘しているように、辛亥革命後、汪精衛が孫文指導の下に北方の軍閥政権との交渉に携わったばかりでなく、連ソ容共を積極的に推進したことに注目しなければならぬであろう。⁽⁶⁾ この点については少し注釈を付けておかなければならない。

北方の軍閥、特に袁世凱は、辛亥革命後、出獄した汪精衛を革命派とのパイプ役に使おうとしたようである。一方、汪は清朝からの袁世凱の離反を策し、その結果、袁との提携はなるのである。こうして民国成立と同時に孫文は臨時大總統

の地位につくが、孫文はすぐに袁に大總統の地位を譲り渡すことになる。しかし、袁世凱の皇帝登極への野望の前に同盟会は懐柔・彈圧され、汪も一九一二年に渡歐してしまふ。一九一五年には討袁の檄に応じて一時帰国するが袁の急死で歐州に戻る。一九一七年に孫文の要請を入れて帰国。その後は、各地の軍閥との合従連衡によって存続していた孫文に代わってそれらの諸軍閥、中国共産党、及びソ連との交渉に重要な役割を果たしていたのである。

もう一つ、国共合作に最初反対していた汪精衛が後に連ソ容共を積極的に推進していったという評価は一般的にいつても正当なものであろう。但し、どの程度に「積極的」であったかは問題である。共産主義を信じてそうしたわけではなかったことは留意しておくべきであらう。例えば、中国国民党が一九二四年に改組する際、一全大会に提出する文書をめぐって汪とボロディンは次のような議論を戦わしている。汪はコミンテルン側の「勞農大衆」という文言では「民主的でないし列強が中国から離れてしまふ」として「国民」に代えようとする。それに対してボロディンは汪を「西欧デモクラシーの幻想を知るのみで、あてにならぬ外国の同盟国を捜し続けている」と批判する。このやりとりは、汪が後に国共合作（連ソ容共）を停止（「分共」）していることを考え併せてみても、汪が共産主義とは最初から一線を画していたことを示していて興味深い⁽⁸⁾。

以上まとめれば、汪精衛は、孫文の革命運動に参加して間もない頃から、国民党の内外において既に傑出した理論家として知られ、さらに清朝高官の暗殺未遂によって革命家としても著名だったのであり、同時にまた、その弁舌を生かして孫文に代わってソ連、各地方の軍閥そして誕生間もない中国共産党との交渉にも当たっていたことが指摘できるのである。さらに付け加えるならば、中国国民党の宣言や綱領、特に中国国民党の改組に係わるそれらの草稿を作る仕事はもつ

ばら汪が当たっていたことである。⁽⁹⁾

注

(1) 堀川哲男「孫文の遺書をめぐって」、京大人文、二〇号、一九七四年三月 二一〜四〇ページ。

ちなみに孫文の遺書は国民党宛(『遺囑』)、ソビエトロシア宛(『致蘇俄遺書』)そして家族宛(『遺囑』)の三部からなる。こ
 の中でも特に国民党宛のものが、党の将来に係わってくるといふ点で重要である。

国民党宛『遺囑』は、なるほど堀川の推理するように、汪精衛が国民党内の右派と左派の意見を調整する「まとめ役」となって
 その内容が出来上がったのであろう。したがって、最近、伊地智善継と山口一郎が監修者となって出版の完了した『孫文選集』
 (第三巻 社会思想社 一九八九年)に収められている『遺囑』の解題には「この遺囑は中国国民党中央政治局が起草し、孫文の
 同意をえて、三月十一日、夫人宋慶齡の力をかりて孫文自身が署名したものである」(九三ページ)となっており、「中国国民党中
 央政治局」のなから汪精衛の名前は消え去っている。

しかしながら、孫文の後継者闘争という私の観点からすれば、党内左右両派の意見が勘案されたという事実よりも、『遺囑』の
 草稿を実際に汪精衛が書いたとされている事実の方がもっと重要ではないかと考える。なぜならば、一般には「汪精衛が草稿を書
 いた」とされているからである。

例えば、この時代についての日本における今日の標準的な教科書(但しレベルが高く研究者向け)である波多野善大の前掲書に
 は「汪兆銘が起草してかれ(孫文―引用者注)が承認した」(九〇ページ)と書かれている。また、アメリカで出版された中華民
 国時代の人名辞典として権威あるH・ブーアマン等編著もそのWang Ching-weiの項で「二月二十四日に汪精衛が孫文の政治的
 遺書の草稿を書いた」といっている(Howard L. Boorman and Richard C. Howard eds., *Biographical Dictionary of Re-*
publican China, New York and London: Columbia University Press, 1970, p. 371)。それらだけではなく、近年「中国大
 陸で続々と出版されつつある次のような汪精衛伝も汪精衛が孫文の遺囑を書いたことで一致している(蔡徳金『汪精卫評伝』、四
 川人民出版社、一九八八年四月、八二〜八五ページ。同少华『汪精卫伝』、吉林文史出版社、一九八八年二月、五三ページ。李理・
 夏潮『汪精卫評伝』、武汉出版社、一九八八年四月、一一六ページ)。また言わずもがなの感もないではないが、日本軍を背景にし
 て立てられた南京政権の時期に出版された張江裁編『汪精衛先生行實録』(中華民国史料編行會 一九四三年)には「三月十二日
 國父以病卒於協和醫院。易簣時。先生侍側。承命擬遺囑稿。」(『汪精衛先生年譜』の六ページ)とある。また、英文の孫文伝で知ら

れるウィルバーは近著でも注なしで汪精衛が起草したとして云々 (C. Martin Wilbur, *The Nationalist Revolution in China, 1923-1928*, Cambridge: Cambridge University Press, 1983, p. 21.)。

もう一点注意したいのは、「遺書のことを病人自身に向かって切り出すという厄介な役割が、孫科(孫文の長男)・宋子文(孫夫人の弟)・孔祥熙(孫夫人の姉婿)と北京政治委員会を代表する汪兆銘におわされた」(三三ページ)という堀川の記述についてである。確かに汪精衛は誰かが進んでやりたいとは思わないような「厄介な役割」を押しつけられたといつてよいかもされない。それはまた、そうした大役を委されるほどに他の黨員から既に信頼されていた——実際は汪精衛以外に他のすべての政治委員がいなかったために汪が押しつけられたのかもされないが——ことを証明しているとも言えるばかりでなく、そのように微妙なことが言える程度に孫文とも近しかったことをも物語っている。孫文の後継者争いを考えるとき絶対に看過してはならないことがそれだと考えられる。

(2) 『孫文遺囑』に関しては、注(1)で述べたように汪精衛がその草稿を書いたとされたことはかりでなく、今後、連ソ容共を統行するか否かという重要な問題とも係わっていた。左派(そしてポロディン)はその統行を明記する旨(特にソ連宛遺書に顕著)を盛り込み、右派の動きを封じたはずである。他方、右派はあいまいなままにしなければならなかった。こうした中で、堀川の推定するように、ソ連宛遺書と国民党宛遺書の「とりあつかい」に差をつけるという汪の示した妥協線で左右両派が共に満足したのである(堀川前掲論文 三六ページ)。ともかく汪精衛のリーダーシップによって『孫文遺囑』は出来上がった訳である。さらにもっとも包括的に関係史料にあたっていると考えられる汪精衛伝の著者もまた、汪精衛は『孫文遺囑』を残す上でリーダーシップを取ったことの功績で孫文の後継者に選ばれることになったという見方をしていく(蔡徳金前掲書 八二ページ)。

(3) 今日では汪精衛は一八八三年生まれと考えてよいと思われる。例えば、張江裁編前掲書の「汪精衛先生年譜」に「中華民國紀元前二十九年癸未。(公元一千八百八十三年清光緒九年) 先生一歳」(一ページ)とある。さらに最近中国大陸で出されている前掲の汪精衛伝もすべて一八八三年説をとっている(同少華前掲書の一ページ、及び同書巻末の「附录・汪精卫年表」の三一五ページ、蔡徳金前掲書の一ページ、李理・夏潮前掲書の一ページ)。また前掲ブライマン等の人名辞典も「4 May 1883-10 November 1944」(Vol. 3, p. 369)となっている。

一方、筆者の知るかぎりであるが、戦前に日本で出版された汪精衛伝は、汪を一八八四年生まれとしているのがほとんどである(森田正夫『汪兆銘』、興亜文化協会、一九三九年九月、八ページ。澤田謙『叙伝 汪兆銘』、春秋社、一九三九年十二月、二一

ジ。松山悦三『人間汪兆銘』、人生社、一九四〇年一月、七ページ。安藤徳器編訳『汪精衛自叙伝』、大日本雄弁会講談社、一九四一年九月、二ページ及び巻末「汪精衛略年譜」の一ページ。それらの伝記をもとにしてごく最近日本人によって書かれた汪精衛伝は当然一八八四年説を取っている(山中徳雄『和平は売国か…ある汪兆銘伝』不二出版 一九九〇年)。また、戦後の早い時期に汪精衛研究に着手したアメリカ人研究者 James R. Shirley は、それら日本語による伝記に依拠して一八八四年説をとっている (*Political Conflict in the Kuomintang: The Career of Wang Ching-wei to 1932*, Ph. D. Dissertation to the University of California, 1962, p. 9)。

(4) 汪精衛が『民報』に発表した語論文は『汪精衛集』(上海 光明書局 一九二九年)の全四巻のうち第一巻に載録されている。特に「民族的國民」と「論革命之趨勢」は特に有名である。この中国語版は戦前、全四巻の予定で日本語訳が試みられた。その日本語版の『汪兆銘全集』の第一巻には中国語版の第一巻の全論文および第二巻からの二本の論文が合わせて収録されている(東亜公論社一九三九年十二月)。但し、日本語版の第二巻以降は出版されなかっどうか不明である。

(5) 蔡徳金前掲書、四五ページ。なお、汪は死刑にならなかつたことを肅親王のおかけであるとしてその恩義を一生忘れなかつたようである(同書、四七ページ)。

(6) 山田辰雄『中国国民党左派の研究』(慶応通信 一九八〇年)の第三章の「孫文指導下の汪精衛の役割—一九二四—一九二五年—」一〇五—一三三ページ。

注の(3)で掲げた日本語による汪精衛の伝記はそれらの出版された年月日を見れば執筆者たちの共通した意図が明らかである。すなわち汪精衛を近衛首相の「東亜新秩序」に共鳴して決起した政治家として描いていることである。それに対して、一九六八年に発表された山田のこの論文は戦後の本格的な汪精衛研究の草分けと言ってもよいものである。

もっとも、辛亥革命後の汪精衛の足跡をたどるとき、一九二二年に同盟会は中華国民党(一九一九年に始まる今日の中国国民党の前身)に名を改めるが、汪精衛はそれへの入党を拒んでいることはどう理解すればいいのであろうか。それを解くヒントの一つとして、「孫文への個人的忠誠を誓うよう黨員に要求したから中華国民党を支持するのを拒否した」と汪精衛は当時言っていたらう(Shirley, F. Gilbert Chan, 'Revolutionary Leadership in Transition: Sun Yat-sen and His Comrades, 1905-1925', *China 4*, El Colegio de Mexico, 1982, p. 40)。

(7) Daniel N. Jacobs, *Borodin; Stalin's Man in China*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1981,

p. 129. また、テ・イ・カルトウノヴァ「コミンテルンと国民党改組問題」(国際労働運動研究所編・国際関係研究所訳『コミンテルンと東方』共同産業出版部 一九七一年)にも同種の記述がある(二六一―二六二ページ)。

(8) 汪が共産主義のイデオロギーに共鳴して国共合作を支持したのではないならば、何が目的だったのであろうか。横山宏章は、その『孙中山の革命と政治指導』(研文出版 一九八三年)で、汪は政治的基盤が弱かったから、孫文の後継者争いに共産党を「自己の政治的基盤として利用する」意図があったと推定している(二二五―二二六ページ)。

(9) Tang Liang-li (湯良禮), *Inner History of the Chinese Revolution* (London: George Routledge & Sons, 1930) の一九七ページの脚注には「同盟会の創設以来ずっと孫文の出した重要な宣言は全て汪精衛が書いてきた」とある。この著者の湯良禮は同書の出版された当時、国民党中央執行委員会のイギリス代表であり、またヨーロッパ特派員をも兼ねていた。

二

一九二五年三月十二日に孫文が北京で客死したあと、同年の七月一日に広東で国民政府は成立する。汪精衛は政府主席(正式には国民政府委員会常務委員会主席)となり、同時に軍事委員会主席をも兼任する。つまり、汪は政治的かつ軍事的な頂点に立ったわけである。しかし、この時、広東国民政府の前身に当る大元帥府の代理大元帥であった胡漢民が新政府では外交部長に格下げされていることに注目する必要がある。これは国民政府の成立そのものが一種の政変⁽¹⁾だったことを暗示している。

それでは広東国民政府の成立はいったいどのような政変だったのであろうか。結局のところ、孫文の後継者をめぐって始まった党内闘争の結果として、その第一候補の胡漢民に汪精衛が取って代わると同時に、汪が蔣介石と合作する出発点となったのがこの政変だったと私は考える。

それでは胡漢民は何故に失脚していくのであろうか。

胡漢民失脚の原因を検討する前に、この時、国民党の根拠地、広東がどのような政治軍事情勢にあったのかをまず押さえておかなければならない。

孫文の死去する一九二五年当時、広東は次のような軍事的危機に直面していた。一九二二年に孫文は陳炯明のクーデタによって広東から追い払われるが、翌二三年再び広東を取り戻す。しかし、一九二四年の末に孫文が北上すると、陳炯明は今一度広東を脅かし始める。そこで、一九二五年二月、陳炯明討伐のためのいわゆる「第一次東征」が実施される。それに動員された友軍の内、雲南の楊希閔と広西の劉震寰は広東に出てきたが、そのまま居座って動こうとしなくなり、広東大元帥府はかれらの軍事的な脅威にさらされてしまうのである。

一方、政治的危機とは国民党内の左右両派の対立が激化し党が二つに分裂しかねなくなっていたということである。一九二五年の二月には上海の内外棉紡績工場で、四月には青島の紡績工場でストライキが起き、五月十五日には上海で有名な「五・三〇」事件が起きる。これによって「反帝反軍閥」を訴える労働者・農民の運動が各地に広がり、共産党および国民党左派の勢力が台頭してくるのである。それに対して、孫文北上のとき代理大元帥に任命された胡漢民は、国民党内に影響力を増す左派とそれを押さえようとする右派との対立が激化していく中で、右派の立場にますます近付いていった。大元帥府内でも強まってくる左派的風潮の中で、胡はますます孤立化していく傾向にあったのである。

ところで、胡漢民が代理大元帥であったとすれば、何故、新設された国民政府の初代主席にかれがすんなり横滑りできなかったのであろうか。当時かれ自身のみならず、内情を知らない者は汪精衛の主席就任を意外なこととして受け止めて

いた。⁽²⁾なぜならば、汪は政治的な地位や影響力の点で胡や廖仲愷には及ばなかったからである。広東国民政府樹立の仕事にたずさわった陳公博の見解を参考にすれば、胡が主席に就任できなかった理由は次のようなものであった。⁽³⁾

一つは広州市の軍事的背景の問題と係わっていた。当時、国民党が本拠にしていた広州市は、既に指摘したように、雲南の楊希閔と広西の劉震寰両者の軍事力の脅威にさらされていた。さらに、楊希閔は北京の段祺瑞と呼応し、劉震寰も昆明の唐繼堯と組んで国民党の打倒を計っていることも明らかとなり、楊劉を討伐せざるをえなかった。また、国民政府の創設に先だって信頼できる軍事的基盤を築いておく必要もあったのである。この時、党最高幹部会で胡漢民は劉震寰の討伐にあくまで反対し、具体的に左派の幹部、廖仲愷と対立し、結局は多数決に屈する結果となってしまう。実際に、楊劉が討伐された後、陳公博の言葉をかりれば、胡漢民は「主張上の失敗者」となったのである。こうして、胡漢民は国民党内の左右両派の亀裂を和らげる努力をしないどころか、さらに不運なことに「大元帥」としての権威を担いえないことを露呈してしまったわけである。

もう一つは、孫文を長い間支えてきた軍人の許崇智と文人の胡漢民との亀裂が深まっていたことが上げられる。一九二二年に孫文が陳炯明に広東を追われたとき、許崇智は広東の奪還に失敗した。胡漢民はその責任が許にあるとしてかれを批判していた。それを耳にして許崇智は胡漢民にことごとく反対するようになり、胡漢民が国民政府初代主席になるのを阻止しようとしたのである。してみると許崇智が汪精衛の初代主席就任を支持したのはおそらく胡を落とすための当て馬に汪を選んだからであろう。また、胡漢民と許崇智の性格の違いにも陳公博はふれて、許崇智が驕慢であったのにたいし、胡漢民は聡明であることを自負していたから、二人は当然衝突したのだと言っている。そういうことは十分にあ

りそんなことだと考えられる。

陳公博は主としてこれら二つの理由を掲げているが、さらに胡漢民の性格の問題にも言及している。胡は舌鋒鋭く、多くの人に好かれていなかったようである。要するに、理論家としては優れていたのかも知れないが、政治家として様々の立場の人々をまとめていけるだけの魅力と指導力に胡は欠けていたようなのである。その点に関連するが、湯良禮の引いているエピソードは政治家としての胡漢民の特質をよく物語っている。胡漢民は実兄の青瑞が自己の会社に大元帥府のカネを流用したり、弟の毅生が討伐の対象になった楊希閔と結びついていることを知ってはいても、そのままに放置しておいた。これが当時公然の秘密になっていたというのである。⁽⁴⁾ 国民政府が成立して約一カ月半後に起きた廖仲愷暗殺事件の黒幕が胡漢民ではないかという嫌疑を受けて胡は外遊を余儀なくされるのもなるほどと思われるのである。

以上のことから分かるように、国民政府の樹立される頃までに、胡漢民は、孫文と苦勞をともにしてきた他の古参の元老たち、特に軍人の許崇智とは仲違いし、左派の指導者、廖仲愷とも対立して、ますます孤立化への道をたどっていたばかりでなく、政治家としてもいわゆる「器」にかけるところがあつた、新政府の主席にはふさわしくない人物と見做されるようになっていたのである。

さて、それでは胡漢民に代わる人物として何故に汪精衛でなければならなかったのであろうか。

まず、その頃、孫文の後継者たりえた幾人かの人物を取り上げながら考えてみよう。

汪精衛は胡漢民とはそれほど年齢もかけ離れてはいなかったし（胡は一八七九年生まれで汪より四歳の年長）、かれらの交友も日本留学時代に始まっている。しかもこの時代に発刊された『明報』の頃から二人は論客として知られ、かれら

自身も親友であった。また孫文の側において秘書の役割を果たしてきた点でも汪と胡はともに似たりよったりのことをしてきた。したがって、能力とキャリアからいっても党内において汪精衛と胡漢民の二人はともに孫文の後継者にふさわしい威信を備えていたといつてよい。但し、辛亥革命後、胡漢民は一貫して孫文の右腕になって働いていたのに対し、汪精衛は五、六年間、海外にいて（一時、帰国するが）、国内政治にタッチせず官職には就かないとも宣言していた。⁽⁵⁾したがって、その分、胡漢民の方が早くから頭職に就くことになったのであろう。⁽⁶⁾

一九二三年に孫文は国共合作に踏み切ったが、汪精衛は当初、それに反対していても後には積極的にその推進に協力する。この点で胡漢民が最初は賛成、後に反対となったのと対照的であった。⁽⁷⁾また胡漢民が早くから晴れの舞台に立ち、自己の派閥を育成してきたのに対し、汪精衛はその頃まだ国民党内に確固たる基盤をもっていなかった。胡漢民に遅れをとっていることは明白であったから、汪は時流に乗ることによって自己の政治的地歩を固めようとしたのかもしれない。実際、一九二五年八月二十日に廖仲愷が暗殺された後、汪精衛は左派の指導者に目されることになる。

むしろ、孫文の後継者として汪や胡に拮抗できるだけの黨員としてのキャリア（党歴）を備えていたのはこの廖仲愷であった。⁽⁸⁾かれは一八七八年の生まれで胡漢民より一歳年上であり、中国同盟会以前から孫文の革命運動と係わっていた。もっとも、汪や胡のように華々しい言論活動よりも地味な道を歩み、財政のエキスパートとして知られた。それにもかかわらず、いったん国共合作路線が決まると、左派の中心人物として頭角を現していった。そうであればこそ、もし廖仲愷が主席になったとすれば、国民党内の左右両派の対立が深刻になっている最中、党を二つに割る（おそらく右派が飛び出していく）危険があった。こうしたことを自覚してであろうか、廖仲愷は汪精衛の交渉能力及び右派の人々との繋がり

高く評価し汪を主席に推薦したのである。⁽⁹⁾

さらにもう一人の潜在的後継者、蔣介石は一八八七年に生まれ、汪や胡や廖よりも若かったし、革命運動に参加したのも辛亥革命以後のことである。孫文との結び付きは一九二一年頃、緊密になり、一九二二年、陳炯明の反乱のとき、永豊艦上で一カ月以上も孫文とともに戦ったことが蔣にとって運命の出会いであった。翌一九二三年にはソ連視察の一員となる。国共合作後、ソ連の援助で設立された黄埔軍官学校の校長となり、以後は党直属の軍を支配できるようになる。当時蔣は左派的なポーズを取っていたし、また胡漢民に対する個人的な反感もあつたためか、国民政府成立時には汪精衛を支持したのである。⁽¹⁰⁾

次に、連ソ容共のソ連側の担い手、ボロディンは孫文の後継者についてどう考えていたのか、考察しておく必要がある。何故なら、一九二三年十月に広東に来て以来、孫文とともに連ソ容共を具体化し、実際に国民党の改組、党軍の創設、根拠地としての広東の確保等の成果を上げてきたのが他ならぬボロディンだったからである。⁽¹¹⁾

ボロディンは孫文の後継者として胡漢民、汪精衛、廖仲愷の三人を想定していた。

ボロディンにとってはその中でも後継者に一番なつて欲しくない人物が胡漢民だった。というのも胡は共産党やロシア人顧問たちとの協力に強く反対するようになっていたからである。したがって、ボロディンは胡の主席就任阻止を画策することになる。

これに対して汪精衛は、胡漢民のように国民党内に確固たる支持基盤をもっていなかったが、孫文の忠実な弟子を自認し、孫文の引いた連ソ容共の路線を継承したいと考えていた。汪精衛は孫文のような個人的魅力に乏しい上に、能力ある

政治指導者ではないとポロディンは判断しながらも、胡漢民に匹敵するだけの威信を党内に持っているのは汪を除いて他にいないと見ていた。

残りの廖仲愷は胡や汪ほどの威信を党内に持っておらず、ロシア人と共同歩調を取る点ですでに孫文を越えてしまったとポロディンは見做していた。にもかかわらず、ポロディンが一番頼りにしていたが廖仲愷であった。なぜなら、廖は国共合作を推進するそれまでの仕事をポロディンと一緒に率先してこなしてきたばかりでなく、何かをするときには必ずポロディンに相談してきたからであった。

結局、連ソ容共路線を続ける以上、党内に基盤のない汪精衛を祭り上げて、実質的には廖仲愷をキイ・パーソンにするというのがポロディンにとってベストな選択と行ってよかった。また、一で述べた『孫文遺囑』の起草過程に、実はポロディンも立ち会っている。かれが国民党の左右両派をまとめる汪精衛の指導能力を目の当たりにしたことも汪擁立を決心する理由になったことは確実であると考えられる。

さて、胡漢民は当然のことながら孫文の後継者として選出されたいと願っていた。⁽¹²⁾五月二十一日に胡は代理大元帥の称号から「代理」を取った大元帥の名義で、大本营參謀団を設けよ、という命令を発している。⁽¹³⁾

こうした胡漢民の先手を封じるために、廖仲愷等はまた北京にいる汪精衛に電報を打って帰広を促し、汪は潮州で「東征」中の蔣介石と会うことになるのである。これは第一次蔣汪合作がいつ成立したのか、に係わってくる問題である。

J・シャレーの研究がこのあたりの経緯を説明する上で参考になる。かれは毛思誠編著、『民國十五年以前之蔣介石先生』の記述を追っていく。⁽¹⁴⁾

汪精衛は、一九二五年五月八日、潮州に到着し、ここでまず蔣介石と会談している。この日、汪精衛は蔣介石に孫文の臨終の様子を話し、蔣介石に感銘を与えている。同時に、汪は党務の話に及び、自分の進退を蔣介石の決定に委ねたいと言ひ、蔣は汪の厚意に深く心動かされる。⁽¹⁵⁾翌日、かれらは汕頭に行き許崇智に会う。十三日には廖仲愷と朱培徳が汕頭に到着。その夜、かれらと汪、蔣、許を交えた五人で午前一時まで会議を開き、広東を回復するための計画を練ったとされている。⁽¹⁶⁾シャーレーはこう推測している。「汕頭会議が公式の党史で無視されているのも故なしとしない。しかしながら、その後の事の成り行きに照らしてみるならば、ここで胡漢民を討ち倒す方法が決まったことはありそうなことだ」と。⁽¹⁷⁾第一次蔣汪合作が実現したのはおそらくこの時だったのではないかと私は推定するのである。⁽¹⁸⁾

いずれにしても、一九二五年六月十三日から二十八日まで開かれた国民党中央執行委員会で国民党総裁の職は、その地位にふさわしい人がいないという理由で廃止され、中央政治委員会を国民党の最高決定機関とした。こうして孫文死後は集団指導体制になったわけである。それと同時に、政府機関として大元帥府を廃し、国民政府を組織するという動議を廖仲愷が提出し、汪精衛、許崇智、蔣介石の賛成で可決された。政府主席には汪精衛が選出され、これによって胡漢民の望みは断たれたのである。⁽¹⁹⁾

注

- (1) 胡漢民を研究する上での基本文献としてまず最初に蔣永敬『胡漢民先生年譜』（台北 中央文物供應社 一九七八年）を掲げねばならない。また胡漢民の著作、論文、書簡を収録したものととして中國國民黨中央委員會黨史委員會編『胡漢民先生文集』（全四冊）（台北 中央文物供應社 一九七八年）がある。さらにごく最近大陸中国からは周聿峨・陈红民『胡汉民评传』（广东人民出版社 一九八九年）が出版されている。なお、中国社会科学院近代史研究所の出している『近代史資料』にはその四五号に「胡汉

民自傳」(一九八一年八月 一〇六八ページ)、五二号に「胡漢民自傳續篇」(一九八三年十一月 三〇七九ページ)が掲載されている。もちろん前掲ブリアマンの英文の人名辞典も参考になる。

(2) 蔡德金前掲書、八八ページ。また胡漢民当人も、娘の木蘭によれば、この人事を根本的にロシア人顧問のせいだとしながら、この時の無念さを「我乃一黨員、凡黨之決議、我必遵守。今黨方派我爲外交部長。吾亦欣然受命、焉敢不就職？ 衆人謬矣！」と語っていたと伝えている(蔣永敬同上、三三五～三三六ページ)。この表現はやや自棄っぱちの気味があるが、胡の怒りはおつばら汪精衛に向けられ、それ以後、汪とは決して和解することはなかった。

(3) 李鏗・汪瑞炯・趙令揚編註前掲書 二八～二九ページ。

胡漢民失脚の原因についての代表的な見解と考えられるのは次の二つのものである。一つは蔣永敬前掲書のように、ロシア(ポロディン)が汪精衛の野心を利用したというものである(三三二ページ)。もっとも、この見解は一九三〇年に胡漢民自身の発表した見解を踏襲したものである。もう一つは蔡德金前掲書のように、国民党の左右派閥抗争(右派の推す胡漢民では左派が反対、左派の推す廖仲愷では右派が反対)から生じた人選上の「真空」に汪精衛がはまったとするものである(八九ページ)。しかし、この見解は右派と左派を固定的に捉え過ぎていて嫌いが多分にある。

以上の議論は形式的に過ぎる感があり、さらに掘下げて考察する必要があると考えるのは私だけではないようである。既に掲げた同少華の『汪精衛傳』は、陳公博の分析に倣って、胡漢民没落の原因として①劉揚が討伐されたあと胡漢民の人望がなくなったこと、②胡漢民と許崇智の不和、そして③胡漢民の性格上の欠点、の三点を上げている(五五ページ)。また、周聿峨・陳紅民前掲書は、労働運動の盛り上がり背景に左派の強くなっていく時代状況の中で、「中間派」であった胡漢民は結局、歴史の流れに取り残された(「時代の落伍者」と評している(一七三～一七五ページ))。

(4) Tang, *op. cit.*, p. 200.

(5) 湯良禮によれば汪精衛は、辛亥革命後、官に就かないことを公言していたが、孫文亡き後は党の責任を負うものとして出馬すべきたど、いう説得を受け入れたとしている(*Sin. p. 200*)。一方、右派の大物、鄭魯は、主席投票で汪がかれ自身の名前を書いたと嘲笑しながら、「…由此次選舉看來、完全表現他(汪を指す)引用者注)是個熱心利祿的人、言行絕對相違。我從此就鄙薄汪兆銘了。」と汪を揶揄している(蔣永敬前掲書 三三五ページ所収)。

(6) たとえば、辛亥革命のとき広東を解放した直後(一九一一年九月)胡は広東都督に就任している。

- (7) 周聿峨・陳紅民は前掲書のなかで、今日、胡漢民が最初から孫文の連ソ容共に反対していたかのごとく考えられているが、実際にそれは歴史的事実と異なっていることを的確に指摘している(一四八ページ)。
- (8) Boorman and Howard eds. *op. cit.* (Vol. II), pp. 364-367.
- (9) Shirley, *op. cit.*, p. 126.
- (10) 蔡德金前掲書 八八〜九一ページ。
- (11) Jacobs, *op. cit.*, pp. 173-174. また、張作霖が北京のロシア大使館から押収した文書には、もっと露骨な表現であるが、「汪は野心的であるが定見がないので、便利な道具として使うことができる」とポロディンは大使館宛の報告に書いていた(Chung-qi Kwei, *The Kuomintang-Communist Struggle in China: 1922-1949*, the Hague: Martinus Nijhoff, 1970, pp. 28-29)。
- (12) こうした胡漢民の希望は誰もが知っていたようである(Tang, *op. cit.*, p. 204)。胡漢民も孫文の病篤しという電報を受け取った直後、党政軍の要人を集めて、「先生以后方党政軍諸事交給我一人負責、今先生病危、万一不幸、我主張改組大元帥府為政府、用委員制共同負責。」と提案した。しかし、廖仲愷等は押し黙ったまま返事をしなかったと言っている(前掲「胡漢民自傳續篇」三三二ページ)。おそらく胡漢民としては政府設立のイニシアチブをとってその長に選出されるという筋書きを立てていたであろう。
- (13) 「大元帥爲設立大本營參謀團令」(中國國民黨中央委員會黨史編纂委員會編『革命文獻 第十一輯 國民革命軍建軍至統一兩廣史料』台北 中央文物供應社 一九五八〜六〇年 二八一ページ所収)。
- (14) Shirley, *op. cit.*, pp. 121-122. それ以前には汪は北京で孫文が死の床についていた時、ロシア大使館に招かれ、カラハンとポロディンから「孫先生の病已經絶望了、今後中國國民黨的領袖、除了你更有誰敢繼承呢?」とおおられ、これを聞いて汪精衛は「便欣然色喜。」だったという(蔣永敬前掲書、三三二ページ)。これは汪精衛が野に下っていた当時、南京政府立法院長であった胡漢民が一九三〇年八月十八日立法院で行った報告であるから潤色の施されたものであろう。しかし、いづれにせよ、汪が胡と対決する決心をした時期が予想できそうである。その意味でも、『孫文遺囑』をまとめ上げる時期が汪にとって重要な意味をもっていたはずである。
- (15) この部分を実際に毛思誠編『民國十五年以前之蔣介石先生』(香港 龍門書店 一九三六年初版 一九六五年再版)にあたってみると、「八日。下午。汪兆銘偕陳璧君來潮。(新自北京回) 訪公於湖軒述 總理病、眷中猶以微息呼、介石憐憫不已。公聞之。嗚咽良久。既而

兆銘傾談黨事。並謀個人行止。欲得公一言而決。公甚感其親愛也。」(四二六、四二七ページ)。最近香港から出版された宋平『蔣介石…總司令・委員長・總裁・主席・總統』でも一九二五年五月八日に汪精衛が前線に蔣介石を訪ね孫文臨終の話をし、かれの心を掴み「孫中山の継承人」になったと言っている(利文出版社 一九八八年 八六ページ)。但し出典は明記されていない。

(16) 劉紹唐主編『民國大事日誌』(第一冊 傳記文學雜誌社 一九七八年再版)の五月十三日の記事には「廖仲愷、朱培德等抵汕頭、與蔣中正商解決廣州緊急局勢」とある(二八九ページ)。

(17) Shirley, *op. cit.*, p. 122.

(18) ジェイコブズは汪精衛を汕頭に呼び出す電報をボロディンが廖仲愷に打たせたと推定しているようである(Jacobs, *op. cit.*, p. 175)。

(19) Tang, *op. cit.*, p. 204.

三

さて、汪精衛は一九二五年七月一日、国民政府主席に就任するが、汪の天下は一年も続かなかった。一九二六年三月二十日には蔣介石の発動した「三・二〇事件」事件、いわゆる中山艦事件をきっかけとして今度は汪精衛自身が主席の座を離れざるを得なくなる。これによって第一次蔣汪合作はあっけなく終焉を迎えるのである。汪精衛は何故、政權の座から追われることになるのであろうか。この問題を究明するためには、まず初めに第一次蔣汪合作政權の特質を明らかにする必要がある。次に、中山艦事件で汪が失脚を余儀なくされる原因を中山艦事件発生の前提条件に焦点を当てながら検討することしよう。

初めに、広東国民政府の成立は蔣汪合作政權の始まりだといっても、まだ政府には蒋介石、汪精衛以外にもっと重要な左派の指導者、廖仲愷がいたことを忘れてはなるまい。というのも、既に二で指摘したように、ボロディンは連ソ容共路線の継続を前提として孫文の後継者候補の三人——すなわち胡漢民、汪精衛、廖仲愷——を比較したとき、汪精衛ではなく廖仲愷を実質的なパートナーと考えていたからである。要するに、国民政府を象徴する「尊厳なる部分」は胡漢民に替えて汪精衛に担わせ、国民政府の「機能する部分」は廖仲愷に担当させるというのが当時のボロディンの構想だったといつてよいと考える。ついでに言えば、当時の蒋介石はその経験もまだ軍事的側面に限られたもので、かれの運勢は「ボロディンとロシアの肩にかかっていた」と言われる状態であつた。⁽¹⁾

ところで大元帥府が国民政府に名前を変えたからといって一夜にして政府に変身できるわけではない。国民政府がまず最初にするべきことは大元帥府時代の旧制度の改革であつた。特に、中小軍閥等に分散していた軍事、財政の権限を政府に集中することが緊急課題であつた。そのためかえって新政府の担い手と、それ以前の大元帥府時代の軍事、財政上の特権をあくまで保持しようとするものとの死闘は免れなかつたのである。

蒋介石が国民政府側の軍事上の立役者となる一方、廖仲愷が財政の集中化を一手に引き受けた。後者の財政の集中化に反対する動きが直ちに顕在化する。というのも、これまで既得権を享受してきたものがそれを失うことは生存の危機を意味したし、かれらの不安は政權からますます排除されつつあるという右派の不満（胡漢民に集約される）とも結び付いていたからである。こうして、かれら右派勢力の最初に血祭りにあげたのが左派の指導者、すなわち国民政府財政部長の廖仲愷だつた。この時、ボロディンにとって連ソ容共を続行するための最後の頼みの綱が切れてしまった事を想起すべきで

あろう。⁽²⁾

一九二五年八月二十日に起きたこの廖仲愷暗殺事件をきっかけに、右派勢力は本来の意図に反して国民政府からますます排除されていくことになる。その結果として同年十月二十二日に胡漢民がロシアに追放された（名目は海外視察であるが）ことは右派の凋落を歴然と物語るものであった。そこで、右派は同年十一月二十三日に国民政府の支配区域から遠く離れた北京で西山會議派として結集する。以後、上海を本拠にして広東政府に揺さぶりをかけ、蔣汪合作を突き崩すいわば参謀本部となったのがそれであった。

いずれにしても、右派の追放はポロディンの指導の下に蔣介石、汪精衛、許崇智の三人の協力によって可能となった。しかしほどなく、今度は、陳炯明およびイギリスと組んで広東政府を打倒する計画が発覚したとして、許崇智が一九二五年九月二十日、軍権を剝奪され追放される。残りは、蔣介石と汪精衛となり、ここにおいて蔣汪合作政權は形を整え始めるのである。それ以後、蔣介石の第二次東征（陳炯明の討伐）や南征（鄧本殷の討伐）において主として汪精衛が政治を担当し、蔣介石が軍事を担うという協力体制で広東政權は運営されていくのである。また蔣介石が校長をつとめていた黄埔軍官学校は中央軍事政治学校という名称に改められ、蔣介石は以前と同じく校長に、汪精衛が新たには党代表となつて（前任者は廖仲愷であった）、⁽³⁾ここでも協力体制は実現するのである。

このようにして武人の蔣介石が軍事を、文人の汪精衛が政治をそれぞれ担当する蔣汪合作政權は完成するわけである。但し、蔣汪合作は少なくとも次の二つの前提条件のもとでのみ可能であったことを指摘しなければならない。その一つはポロディンの強力な指導である。というのも、廖仲愷亡き後、ポロディン自らが廖仲愷に代わる役割を果たすしかなかつ

たという事情からである。⁽⁴⁾もう一つは、蔣と汪の双方がお互いに信頼しあい、形式としては国民党の「以党治国」の原則を尊重し、実質的に軍事は政治（特に党）に従属する形を取っていたことである。

しかし、中山艦事件までにこれら蔣汪合作の前提条件はすっかり崩れてしまっている。ポロディンは、ロシアの今後の中国政策を検討する会議に出席するため、一九二六年二月四日に北京に旅だつていく。⁽⁵⁾これで広東にはかれほどの経歴と威信を備えたロシア人が他にいなくなったことで前者の前提条件が消える。もう一つの前提条件は蔣介石の汪精衛に対する不信任感が増大していく中で、徐々に流動的になり、中山艦事件の出現とともに消滅する。なぜならその時蔣介石は軍事委員会主席の汪精衛に何の通告もせず、広州に戒嚴令を布告したのに対して、汪は蔣を何ら処罰できなかったからである。⁽⁶⁾もっとも、事後、蔣介石は汪に直接親書でこの戒嚴令は緊急事態で止むを得なかつたと弁明しているし、また、軍の統制を乱したのでその責めを受けたいという上申書を軍事委員会に提出して恭順を意を示していた。⁽⁷⁾

ところで、中山艦事件とは、一九二六年三月十八日以来の中山艦の動静を「共産党の陰謀」が露呈したものととして同二十日に蔣介石が広州に戒嚴令を布告、海軍局長代理李之龍をはじめとする共産党員を多数逮捕すると同時に、ソ連軍事顧問を拘留、二十二日になって解放した、という出来事である。この挙によって、結果的に、蔣介石は、一人残つた有力なライバル、汪精衛を政府から追い出すことができたばかりでなく、共産党とロシア人の活動に制限を加えることもでき、こうして国民政府に対する事実上の支配権を手にするのである。この点で結果的には中山艦事件は蔣介石の成功したクーデターだったといつてよいであらう。

しかしながら、これまでの中山艦事件についての研究を通観してみると、その事件の全体的な性格についてはいまだ確

定できる段階には達していないようである。⁽⁸⁾にもかかわらず、中山艦事件は誰によって計画されたのか、に論点を絞って見ると、これまでの研究によれば、次の三つの説に絞られてくる。

- ① 孫文主義学会（反共的軍人団体）が主犯で、それに乘った蒋介石の突発的行動説。
- ② 孫文主義学会と蒋介石との共謀説。
- ③ 孫文主義学会、反共派を巻き込んだ蒋介石による計画的行動説。

これら三説の中では北村が最近の論稿で立てている仮説、すなわち③が私には一番説得力があるように思われる。したがって、以下の叙述もその仮説に依拠する。私の考察の焦点は、改めて言えば、汪精衛は何故に中山艦事件を期に辞職することになったのか、そして何故に蒋介石に敗北したのか、である。

そこでまず筆者の視角から中山艦事件についてのこれまでの主たる研究（本稿作成上、示唆されることの多かった波多野論文、山田論文、宇野論文、北村論文を取り上げる）の主旨を整理してみるとおよそ次のようになるであろう。

波多野善大の論文は主要な史料をもとに中山艦事件の後付けを目指したものである。波多野によれば、汪精衛はもともとソ連人顧問と共産党に担がれているのみで、独自の組織的背景をもっていなかった。事件後、汪精衛は、一部の軍長や共産党とともに、反蔣行動を取るよう主張したが、ソ連人顧問は蒋介石に妥協してしまふ。この「妥協によって汪兆銘の立場がなくなり、行方をくらました。ソ連が汪をすてて蔣をとったからである」という。⁽⁹⁾

山田辰雄は、国民党左派（汪精衛）が敗退していく原因を中国革命の主体としての大衆観に手がかりを求めるといふ。すなわち、中国革命に占める大衆観が蒋介石（国民党右派）、汪精衛（国民党左派）そして中国共産党の間で異なっていたとい

うのである。軍権を握る蔣介石にとって大衆は保護の対象であり、自らは大衆に頼られることはあっても頼る必要のない「保護者」であった。一方、共産党は大衆を下から動員する「組織者」であった。党の中枢にいる汪精衛は、一方の軍権を握る蔣介石ともう一方の大衆を動員する共産党という両者に支えられる、大衆の「統合者」としていられるかぎり、政治的地位を維持することができた。しかしながら、共産党の力が増大する過程で、蔣介石は反共に、汪精衛は親共に傾き、「汪精衛は蔣介石の軍事力の行使のまえに敗退せざるをえな」かったというものである。⁽¹⁰⁾

宇野重昭の論稿は、中山艦事件の謎を追いかけるのではなく、中国革命の初期の段階における非正統的な革命思想としての「蔣介石の思想と行動」を理解するという視点に絞られている。そのため、汪精衛が蔣介石に敗れていく原因の究明はなされていないが、「ソ連人顧問が蔣介石に対して強い態度を取らなかった」ことが汪失脚の原因ということになる。⁽¹¹⁾してみれば、どちらといえば、波多野の見解に近いと言ってよいであろう。

北村稔の論稿は、国共合作全体において中山艦事件がどのような基本的意味を持っていたかを探求している。孫文の死去とは「国共合作の要」が無くなったことを意味した。その後の国共の対立激化は蔣介石直属の第一軍から一部将校の離反を生み、さらには蔣介石とロシア人顧問との衝突となる。こうして蔣介石にとって「国民革命軍の要」としての存在根拠が揺らぎ出す。そこで蔣介石は早くも一九二六年三月九日に麾下第一軍の高級将校とともにクーデタ計画を立て始める。つまり、中山艦事件は蔣介石の「突発的行動」ではなく「計画的行動」である。しかしながら、北村によれば、中山艦事件は権力奪取を意図したものというよりも、国共合作を維持するならば、自分を「国民革命軍の要」として人々に認めさせようとする蔣介石の「兵諫」というべきである。こうした見方に立って、中山艦事件で蔣介石の軍隊が汪精衛の支

配に服さないことが明らかになり、ソ連がそういった「権力の支えを失った汪精衛を見限った」から、汪は失脚したという筋である。⁽¹²⁾

以上をまとめれば、汪精衛失脚の主たる原因として、まず第一に蔣介石の支持を失ったこと、第二に、ソ連の協力（特に軍事的それ）を得られなかったこと、第三に、革命の主体について蔣介石と汪精衛との相違等を上げることができである。もちろん、以上の論文は汪精衛失脚の原因を直接に究明しようとしているものではない。この観点から中山艦事件をもう一度見直し、第一次蔣汪合作政權が何故崩壊していくかについて探ってみよう。

そこで、汪精衛とのかかわりで中山艦事件の生じる経過を、以上の諸研究およびその他の研究及び史料を参考にして、整理し直してみよう。

廖仲愷暗殺事件をきっかけとして国民政府からは右派が一掃される。追放された右派は西山会議派を結成し上海を基盤に巻き返しを計る。そこで採用された策が「連蔣倒汪」であった。つまり蔣介石を味方に引き入れて汪精衛を倒そうというのである。その場合、上海は蔣介石のいわば地元でかれの人脈も多いので蔣を籠落させるのに好都合であった。⁽¹³⁾

一方、一九二五年八月二十六日、国民政府は軍事部門を国民革命軍として再編する。その第一軍軍長には蔣介石がなり、かれは「第二次東征」（陳炯明討伐）、「南征」（鄧本殷討伐）の成功で自信を深めていた。しかしながら、当時はまだロシア人顧問の発言権が強く、そのため蔣介石は「北伐」の是非を巡ってかれらとの対立を深めていった。蔣介石は北伐の早期実行を望んだのに対して、ロシア人顧問は土地改革の実行を優先したかったからである。後者の土地改革は革命状況の進行を背景とする広東政府の一層の左傾化に狙いがあり、国民革命の主導権をめぐる争いは確かに熾烈の度を加えて

いた。これが、ボロディンの北上後、蔣介石とロシア人顧問（特にキサンカ）との対立激化という形で現れたのであろう。蔣介石は自分が辞職するか、それともキサンカを罷免するか、明確にしろと汪精衛に要求するが汪は何もしなかった。むしろ、その間に蔣介石はキサンカと汪精衛との関係に、さらには汪への猜疑心を増していく。⁽¹⁴⁾

一方、蔣介石は中央政治軍事学校の校長かつ第一軍軍長として右派（孫文主義学会）と左派（青年軍人連合会）との対立の激化に苦慮し、なんとか両者を融和させようとしていた。そのような時、蔣介石の軍事的集中化を脅威として感じつつあった共産党は蔣介石を「反革命」であるとか、「新軍閥」と呼んだりする。⁽¹⁵⁾ 蔣介石は自尊心を痛く傷付けられ、神経過敏になっていく。

こうした時期に右派の意を受けた広州市長、伍朝枢は「蔣介石はモスクワにいつ立つか？」という主旨の発言を蔣の側近にし、モスクワ行きが自明であるかのような印象を蔣介石に持たせるようにする。実は、それは蔣介石の反共を促すために伍の仕掛けた小細工だったという。⁽¹⁶⁾ おそらく蔣介石はこのことを聞いたときすでに疑心暗鬼に包まれていたのであろう。だから、それを伍に直接問いたたすこともできず、共産党が自分を排斥するか、あるいは汪精衛が自分を陥れる陰謀があるかと理解した。結局、汪が自分を殺そうとしていると判断し、決起する決心をしたのであろう。三月九日の時点で蔣介石直属の第一軍士官とともに会合し行動計画を立てる。

三月十八日、中山艦（艦長は共産党員）が広州から黄埔にくる。その頃、すでに「休息のためモスクワにいきたいが、秘書と一緒に同行しないか」という蔣介石（かれ自身は行く気がない）の誘いに乗って、汪夫人は一刻も早く行きたがっていた。たまたまその催促のために汪夫人は三月十九日、蔣介石に三回、電話する。どうやらこの電話が中山艦事件のき

っかけとなったようである。⁽¹⁷⁾

これで中山艦事件の前提条件は明らかであろう。根本的には広東政府の左傾化を止めようとする西山会議派の策謀、北伐をめぐる蔣介石とロシア人顧問との対立、軍隊内における国共の対立激化、蔣介石の不安に気付きそれを解消しようとしなかった汪精衛の無為無策、そして先手必勝に掛ける蔣介石の決断力、以上の五点が指摘できるであろう。これらの五点を発火直前のガスに例えれば、中山艦の黄埔回航と汪夫人の電話は口火のようなものになったといえる。

次に、事件後、何故に蔣介石の思うように事が運び、結局は汪精衛が何故に辞職することになるのかを考えてみよう。これらの考察は汪精衛が次に政權復帰する機会を狙う時に係わる重要な問題に結び付いていると考える。

事件の根本的な動因は、汪精衛が陰謀によって自分を殺そうとしていると蔣介石が確信したことにあると考えられる。⁽¹⁸⁾したがって、「党に指導者は二人も要らない」ので汪精衛には辞職してもらおうしかないことになる。⁽¹⁹⁾

一方、汪精衛は事件直後、蔣介石を批判する。蔣が反共のために戒嚴令を出したとすれば、国民政府主席兼軍事委員会主席の自分に何故事前に連絡しなかったのか、これは蔣介石の「造反」である。⁽²⁰⁾こうして汪は反蔣戦線の結成を呼びかける。ところがロシア人は、蔣介石の弁明——ロシアへの不満でなくキサンカ個人への不満である——を既に受け入れていた。そのわけは、蔣介石がロシアに不満でないのなら、国共合作の継続は可能であると判断したからである。ソ連の世界戦略として国共合作を続けることが至上命令である以上、蔣介石でそれが可能であるならば、汪精衛でなければならぬ理由はなくなる。しかも軍権を握る蔣介石が汪精衛との協力を拒んでいる以上、仮に中国共産党とロシア人軍事顧問が汪精衛を敢えて担ぐことにもなれば、蔣介石との全面対決は避けられず、国共合作どころではない。してみれば、汪精

衛と組むのは掛けとなり、蒋介石と妥協するのがやはり現実的であったと考えられる。にもかかわらず、ポロディンが蒋介石との協力は長く続かないとも考えていたことは興味深い。⁽²¹⁾一方の汪精衛はポロディンに期待していたが、蒋介石への妥協はすでにロシアの既定方針だったのである。⁽²²⁾

最終的に、蒋介石は汪精衛追放の目的を果たすと同時に、共産党とロシア人顧問の活動制限条件を勝ち取る。

三月二十三日蒋介石自身は「以党治国」原則を破ったから、処分してくれという上申書を政府に提出する。が、これは当然不問ということになる一方、問題のロシア人顧問はすぐに罷免されている。さらに四月二十九日に帰広したポロディンと協議の末、国共合作は継続しながらも、共産党員の活動制限の内容を定めた「党務整理弁法」が蒋介石の要求通りに制定される。他方、蒋介石は国共合作を継続する証しを示すかのように、右派（西山派）とも妥協せず、また急遽帰国した胡漢民を追いやる（おそらく蒋介石の意のままに動くはずもないから、胡漢民には戻って欲しくなかったのが本音だったのであろう）。

蒋介石は四月十六日には軍事委員会主席を汪精衛から引き継ぐ一方、五月十九日には政府主席（正式には中央常務委員会主席）としては、上海の商人で孫文以来の同志、しかも蒋介石の長年のパトロンともいえる張静江を持つてくる。

その間、中国共産党はロシア人顧問から理論的にも実践的にも自立していなかったから萱の外におかれていたも同然であった。ロシアの方針を追認しただけであった。⁽²³⁾

汪精衛はこうした事の成り行きを見届けた上で、結局、目下のところ政權復帰の芽はないと判断し、五月十一日、「遷地就医」のためと称して渡欧。時節の到来を待とうと決心したのであろう。この時、汪は、蒋介石の単独政權では同じ国

民党政権ではあっても権威がないから左右兩派をまとめては行けまい、必ずや自分の出番が回ってくると読んでいたはずである。⁽²⁴⁾

実際、蔣介石の待望した北伐の開始とその進展とともに、ヨーロッパにいる汪精衛のもとに帰国を求める手紙や電報が殺到することになる。それというのも、蔣介石政権に不満のボロディン、共産党をはじめとして国民党左派は政権を広東から武漢に移すとともに蔣介石との全面対決を決意したからである。そのためには依然として声望の高い汪を国民党の正統として玉に据える必要があったのであろう。

一方、汪精衛が重い腰を上げたのが蔣介石の帰国要請を受けた後であったことは注目に値する。敵対しあう兩派の要請があったればこそ、汪精衛はボロディン及びの武漢政権左派と蔣介石との橋渡しがきつとできるといふ自信をもって帰国の途についたのであろう。

しかしながら、汪精衛の読みはどうかやら甘かったようである。蔣介石の腹のうちをおそらく読み損なっていたばかりでなく、北伐の進展しつつかある中国の流動化の速さを到底予想もしていなかったのではなからうか。なぜなら、蔣介石は既に武漢とは決別して南京に政権を立てる可能性も考えていたようであり、汪精衛自身も結局は「分共」を余儀なくされることになるからである。

注

(1) Jacobs, *op. cit.*, p. 186. なお、「機能する部分」と「尊敬な部分」は Walter Bagehot がその名著 *English Constitution* (1867) で用いた用語であることは言うまでもない。

(2) その理由は、ジェイユプズの表現を借りれば、「汪はほとんどの事柄でボロディンの役に立ちたい」といふ意思はあっても性格の

- 強い人物ではなかった。蔣は、力をつけてはいたが、知識人でも思想家でもないし、ボロディンのよく訴える哲学的な主張を理解しなかった」からである (Jacobs, *ibid.*, p. 191)。
- (3) 蔡前掲書の表現を借りれば、「…汪、蔣关系密切、合作融洽、形成了汪主政、蔣主军的局面。」とある (一〇四ページ)。また湯良禮によれば、蔣介石は「汪の政治指導と影響力がなければ、たいした成果は上げられないことが分かっていたし」、「汪もまた蔣の軍事力の助けがなければ、自分が無力であることが分かっていた。これら二人の指導者の心からの協力があつたればこそ、国民党は圧倒的な優位に立つ敵に対して勝利を収めたのである」(Tang, *op. cit.*, p. 226)。
- (4) 一九二五年末頃の広東におけるボロディンの名声と権威は最高と言つてもよかつた (Jacobs, *op. cit.*, p. 186)。蔣介石も、一九二五年十一月七日に行った演説、「總理實行中俄聯合的意義和世界革命統一指揮的必要演講詞」で「鮑羅庭同志的主張就是我的主張…」とまで言っている (蔣中正演講録 出版社不詳 一九二六年? 三九ページ)。他方、汪精衛もボロディンを孫文にかわる師と考えていた (Jacobs, *ibid.*, p. 189)。
- (5) この時のボロディンの北京行きは、モスクワから派遣された A. S. Bubnob 使節団を迎えるためであった。北京では「中国におけるロシアの将来の政策方針」が協議されることになつた (Jacobs, *ibid.*, p. 193)。なお、古屋奎二編著 (中央日報社訳) 『蔣總統秘録』(第六冊 台北 中央日報 一九七六年) では「奉召回國一行」として二月三日に北京に出發したとなつている (八〇ページ) が、二月三日と四日のいずれが正しいかはここでは問題にしない。むしろ、この時ボロディンがブブノフ使節団のために準備した報告書はボロディン自身の状況報告として貴重である。なおその骨子は日本語でも読むことができる (ソ連科学アカデミー極東研究所編著 (毛利和子・本庄比佐子訳) 『中国革命とソ連の顧問たち』日本国際問題研究所 一九七七年 四七〜五三ページ)。
- (6) 蔣介石は「汪兆銘對於 蔣總統處理中山艦事件未經事前商量、頗不愉快」と述べているが、この蔣介石には以党治国の原則も「汪の蔣への信頼」も消え去つてゐることが明白である (古屋奎二前掲編著 九〇ページ)。一方、陳公博の回想録からは蔣介石の反汪の気配を当日微塵も感じてゐなかつた事が分かつて興味深い。李鏐・汪瑞燭・趙令揚編註前掲書には「…當日汪蔣的交誼特別厚、誰也知道」(五九ページ) とある。
- (7) 蔣介石は戒嚴令をひいた直後、「共產黨意圖謀亂、所以不得不緊急處置、請求主席原諒」といった主旨の自筆の汪精衛宛親書を手づてに送つてゐる (李鏐・汪瑞燭・趙令揚編註前掲書 五九ページ)。一方、蔣の側は「三月二十三日具呈軍事委員會、自請處

分。：對於這個呈文、軍事委員會未予處分。」であった(古屋奎二前掲編著 九一ページ)。

(8) これまでの中山艦事件を中心に扱った論稿は主として次のものがある。

先駆的な研究としては、三上諦聰の「中山艦事件の一考察」を挙げる事ができる(『石浜先生古稀記念東洋学論叢』所収、一九五八年 五一八〜五三五ページ)。

比較的新しい研究をあげれば、次のようなものが重要である。

波多野善大の「中山艦事件について」(『中国近代軍閥の研究』河出書房新社、一九七三年、三六三〜三八六ページ所収。原論文は一九六七年に発表)。山田辰雄「中国国民党第二回全国代表大会をめぐる汪精衛と蔣介石——一九二五〜一九二六年——」(山田前掲書の第四章、一三三〜一六九ページ所収。原論文は一九六九年発表)。宇野重昭「蔣介石の連ソ政策…ソ連視察旅行から中山艦事件まで」(高木誠一郎・石井明編『国際関係論のフロンティア』中国の政治と国際関係『東京大学出版会 一九八四年 三三〜五五ページ所収)。北村稔「広東国民政府における政治抗争と蔣介石の抬頭」(史林 六八巻六号 一九八五年 一一三〜一五一ページ)。

(9) 波多野善大前掲書、三三七ページ。

(10) 山田辰雄前掲書、一三九ページ。

(11) 宇野重昭前掲論文、五〇ページ。

(12) 北村稔前掲論文、一四一ページ。なお蔣介石が三月九日に初めてクーデタの謀議をしたことは、北村と同様ジェイコブスも、チンバノフの手記で確認している(Jacobs, *op. cit.*, p. 199)。

(13) Tang, *op. cit.*, p. 230.

(14) 一九二六年二月末から三月初めにかけて蔣介石は汪精衛に次のような手紙を書いたと言っている。すなわち、北伐の実行をめぐる、最初、承認を与えておきながら、ロシア人顧問(キサンカ)が反対すると、態度を変えようでは自主性にかける。「自第一二次全國代表大會以來、黨務、政治、軍事限於被動地位、弟無時不抱悲觀：軍事且無絲毫自動之餘地、革命前途、幾至瀕於絕境」(古屋奎二前掲編著 八二ページ)。一方、陳公博によれば、汪精衛の周辺は事件がおきるまで蔣の「不信」にまったく気付いていなかったことを指摘し、その証拠として第三者の意見、「局面は不要緊的、介石是不會反汪的…」をあげている(李鏘・汪瑞燭・趙令揚編註前掲書、六一ページ)。中山艦事件が人々に意外な印象を与えていたことは、「突発説」があることを見ても注目し

- る。
- (15) 蔣介石を北方軍閥の段祺瑞になぞらえ、「我們團體裏、有一個段祺瑞、要打倒北方段祺瑞、就要先打倒這裏的段祺瑞」と言うものもいた(古屋奎二前掲編著、八三ページ)。
- (16) この話は陳公博が一九三〇年に西山會議派の鄒魯から聞いたものという(李鏐・汪瑞燭・趙令揚編註前掲書、七七〇七八ページ)。また、この頃、汪精衛が共産党に入党し、倒蔣の準備をしているなどという噂が流れ、包惠僧(共産党第一回大会の出席者)も蔣介石の腹心、王柏齡からこのことを聞き、包は「汪精衛就是自找死路、广东的軍隊們不都是我們的嗎？」と驚き呆れている(「中山艦事件前後」『文史資料選輯』第二輯 中華書局 一九六〇年二月 四五ページ)。
- (17) 古屋奎二前掲編著には、十九日には更に変なことが起きたとして、三回の電話がかかってきた様子を次のように記している。「有一個同志——他的名字不能宣佈——起初見面時、就問我『今天你不去黃埔？』我說『今天我回去的。』後來離別了他之後、到了九點至十點鐘模樣、那同志又打電話來問我『黃埔什麼時候去？』如此一連打了三次電話來問我『什麼時候去？』(八五ページ)。一方、老西山派の一人、桂崇基はこの電話の主は汪夫人、陳璧君だったことを、蔣の秘書、陳立夫から聞いたとしている(Kent, *op. cit.*, p. vii and p. 39)。
- (18) 蔣介石が事を起こす決心をしかれの高級將校たちと最初の会合をもったと考えられる日の翌日、三月十日の日記には蔣介石のあの種の決心を示すような記述がある。「十日。上午。公開種種不堪人耳之謠言。此心卻自泰然。未嘗一抱悲觀。自謂『吾以至誠待人。終久當能諒解』。近日反蔣傳單不一。疑我謗我忌我。誣我排我害我者漸次顯明。遇此拂逆之來。精神雖受打擊。而心志益加堅強。……(毛思誠編前掲書、六二五ページ)。中山艦事件後、約五カ月して(一九二六年八月初め)、北伐の最中に蔣は陳公博に、汪が陰謀をめぐらし自分を殺そうとしたと批難している。当時、蔣介石のおそらく熟慮の末に得た結論が「我以爲黨政軍只能有一個領袖、不能有兩個領袖」だったのであろう(李鏐・汪瑞燭・趙令揚編註前掲書、七二ページ)。
- (19) 蔣介石に決起をよびかけられた譚延闓(北村前掲論文、一三四ページ参照)は、反共は口実で反汪が事件の原因であると陳公博に断言している(李鏐・汪瑞燭・趙令揚編註前掲書、六九ページ)。
- (20) 同上、五九ページ。
- (21) Jacobs, *op. cit.*, p. 204.
- (22) *Ibid.*, p. 207.

(23) 但し、当時の中国共産党の指導者の一人、張國燾は国民党の内紛だから干渉しなかったといっている(『我的回憶』第二冊 明報月刊出版社 一九七三年 五〇九ページ)。これは共産党の立場からしても、汪精衛であれ蔣介石であれ、どちらでもよかつた(否)、蔣介石への期待はまだあつた)ことを示していると考えられる。

(24) 中山艦事件を張靜江の策謀とみなす湯良禮は、汪精衛の辞職した理由を大略こう読んでいる。西山派の術中に陥って、蔣介石と決定的に対立してしまわないようにするためには蔣と汪のどちらかが辞職しなければならぬ。汪は実際に病氣だったし個人的な野心がなかったから、自分が引退して、自分の間、蔣介石に任せようとしたのである(Tang, *op. cit.*, p. 246)。シャーレーは、一九二七年四月十七日の *People's Tribune* (Hankao) に載つた汪のインタビューを引用して、湯とほぼ同様の趣旨の理由を掲げている(Shirley, *op. cit.*, p. 144)。

最近の汪精衛伝をものした著者たちの掲げている汪辞職の理由には目新しいものはない。ただ、李理・夏潮が、世論を喚起して蔣介石の責任を糾弾させ、蔣の勢力の増大を抑制しようとする「苦肉計」だつたといっているのが目を引く(前掲書 一三五ページ)。

むすび

本稿は第一次蔣汪合作政權がどのように成立し何故に崩壊したか、を究明しようと試みたものである。この合作政權が成立する根本的な契機を私は孫文の死去に伴う後継者闘争と国民党分裂の危機に求めた。

一では『孫文遺囑』を作成する上で汪精衛がリーダーシップをとつたことに注目し、これを可能にするだけの威信として汪精衛がどのようなものを持っていたのかを確認するため、汪がそれまでの国民党史の中でどのような役割を担ってきたかを、次の三点にまとめた。辛亥革命以前、汪精衛は、第一に滅満興漢のイデオログとして、また、第二に清朝高官

暗殺未遂の革命家としても著名だったことが指摘できる。第三に、辛亥革命後は孫文にかわって軍閥、中国共産党、ロシアとの交渉に当たったことである。

孫文亡きあと、有力な後継者は汪精衛以外にも胡漢民と廖仲愷の二人がいた。かれらを推し退けて、何故に汪精衛が初代国民政府主席になることができたかについて二では考察した。

まず、代理大元帥だった胡漢民が国民政府の主席にはなれず外交部長に降格された理由としては次の三点が考えられる。第一に胡漢民が政府内における軍事戦略上の議論で敗北しかれの代理大元帥としての威信が低下したこと、第二に当時の有力な軍事指導者、許崇智と胡との対立が深まっていたこと、第三に胡の政治的器量に問題があったことである。汪精衛と蔣介石との合作が実際この胡漢民打倒をめぐる始まったことが重要であると考ええる。

次に廖仲愷が何故に自ら後継者の地位を降りたかは、国共合作以後、左派勢力の目覚ましい台頭と関連がある。「反帝」「反軍閥」を指す大衆運動の高揚を背景として国民党内の左派勢力は台頭してきたが、そのため党内では連ソ容共をめぐる左右両派の対立が激化していった。そのような時、もし左派の指導者、廖仲愷が後継者の地位に収まったとすれば、国民党は分裂しかねなかった。そのような事態は是非とも回避しなければならず、だから廖仲愷はむしろ自ら主席の地位を辞退したのではなからうか。但し、連ソ容共路線を続ける以上、左派が主流であることに変わりはなく、その点では廖仲愷が実質的に広東国民政府の指導者のはずだったのである。

ところが、廖仲愷は広東政府成立後まもなく暗殺されてしまう。これ以後、実質的な蔣汪合作政權になったと言っている。しかしながら、この合作政權を成り立たせる二つの前提条件があったと考えられる。その一つは、連ソ容共

のソ連側の担い手であるボロディンの存在である。もう一つは、蔣介石と汪精衛との信頼関係に基づいて、軍を蔣介石が担当し、政治（党務）を汪精衛が担当するという分業体制であった。

蔣汪合作政權を支えていたこれらの二つ前提条件が中山艦事件までに何故に崩れてしまい汪精衛が辞職することになるのかを検討するのが三である。

まずボロディンは中山艦事件の起きる約一カ月前に広東を離れ、かれほどの経歴と威信をもったロシア人がいなくなり、第一の前提条件がくずれる。

ボロディンが去った後、ロシア人顧問と蔣介石との対立が深まり、さらに、蔣介石のこの不信感はロシア人と汪精衛との関係にも向けられる。既に、廖仲愷暗殺をきっかけにして広東を追放された国民党右派勢力は上海を根拠地に蔣介石をして反共に向かわせる工作を行っていた。右派の作戦は見事に当り、共産党とロシア人顧問、さらには汪精衛も一枚からんだ陰謀があるかのように蔣介石に信じ込ませることができた。その結果、合作によって培われていた蔣介石の汪精衛に対する信頼感は憎しみへと代わり、結局、中山艦事件を起こすことになる。

最後に、中山艦事件によって汪精衛はなぜ辞職することになるのかをまとめておこう。

根本的には、蔣介石が汪精衛の存在に身の危険を感じるようになったことを上げなければならぬであろう。汪精衛失脚のない中山艦事件の收拾はありえなかったのである。もっとも、中山艦事件の收拾に関してキャスティング・ボードを握っていたのは実はソ連だったと考えられる。ところが、ソ連は、蔣介石の不満が連ソ容共に対してではなく汪精衛並びにかれと係わりあるソ連人顧問に向けられたものだったことがはっきりすると、ソ連の世界戦略の上から連ソ容共が第一

目標である以上、何も汪精衛でなくても蔣介石でよいという結論になったのであろう。それどころか、軍事力を握る蔣介石との対立を回避しなかったというのがソ連の真意だったのかもしれない。

その一方、汪精衛もまた、ここであえて蔣介石と対決するよりも、しばらく身を引いていれば、必ず自分の出番が回ってくると思われていたと思われる。というのも、当時の蔣介石には国民党の左右両派をまとめていけるだけの威信と力量が十分にあるとは言い難かったからであらう。実際、北伐の進展とともに左派の台頭が目覚ましく、遂には武漢政權を立てるとともに、汪精衛は呼び戻されることになるのである。